

慶応義塾大学国文学研究会編

折口
信夫 まれびと論研究

折口信夫没後三十年記念出版 1

桜
楓
社

執筆 者 紹 介 (執筆順)

西 村 亨 (にしむらとおる)

大正15年(1926)生。昭和23年(1948)慶応義塾大学文学部卒。文学博士。古代国文学を専攻。現在慶応義塾大学文学部教授。著書に『歌と民俗学』(岩崎美術社)『王朝びとの四季』(三彩社)『新考王朝恋詞の研究』(桜楓社)等。

保 坂 達 雄 (ほさかたつお)

昭和23年(1948)生。昭和48年(1973)慶応義塾大学大学院修士課程了。古代文学を専攻。現在慶応義塾女子高等学校教諭。論文に「罪の発生について」(『古代の文学と民俗 国文学論叢新集二』)「神楽歌序説」(『古代詩の表現』武蔵野書院)等。

高 梨 一 美 (たかなしかずみ)

昭和29年(1954)生。慶応義塾大学大学院博士課程在学。古代国文学を専攻。修士論文「つまどひ譚の研究」

伊 藤 好 英 (いとうよしひで)

昭和23年(1948)生。昭和50年(1975)慶応義塾大学大学院修士課程了。平安朝文学、芸能史を専攻。現在慶応義塾高等学校教諭。論文に「能の移り舞いの考察及び玉依姫の性格」(『芸能』第17巻第1号〜第2号)等。

吉 田 修 作 (よしだしゅうさく)

昭和22年(1947)生。昭和52年(1977)慶応義塾大学大学院博士課程了。古代文学を専攻。現在慶応義塾高等学校教諭。論文に「ヒルコ伝承」(『伝承と変容 古シリーズ古代の文学5』)「伝承の人麻呂」(『古代の文学と民俗 国文学論叢新集二』)等。

皆 川 隆 一 (みながわりゅういち)

昭和26年(1951)生。昭和55年慶応義塾大学大学院博士課程了。古代文学及び民俗学を専攻。現在慶応義塾高等学校教諭。論文に「二種のまれびと伝承」(『芸文研究』39号)。

井 口 樹 生 (いぐちたつお)

昭和9年(1934)生。昭和43年(1968)慶応義塾大学大学院博士課程了。古代国文学を専攻。現在慶応義塾大学文学部教授。著書に『風の木水の花』(三友社)『くらしの季節』(実業之日本社)。論文「上代における関についての研究」(国文学論叢4)「万葉皇統譜試考——志貴皇子——」(『古代の文学と民俗 国文学論叢新集二』)等。

折口信夫 まれびと論研究

国文学論叢 新集五

検印省略

昭和58年9月5日初版印刷

昭和58年9月10日初版発行

定価2800円

編 者 慶応義塾大学国文学研究会

発行者 今 井 肇

印刷所 シナノ印刷機

製本所 榊辰文社

発行所 榊 楓 社

101 東京都千代田区猿楽町2-8-13

電話東京(295)8771(代表)

振替東京6-18020

Printed in Japan 3391-830955-0723

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

折口信夫 まれびと論研究 国文学論叢 新集五 目次

柳田国男と折口信夫

——まればと論研究の序に代えて——

西村 亨……………7

まればとの成立

——折口信夫と同時代——

保坂達雄……………35

まればと論の形成と展開

高梨 一美……………68

まればとの基本的性格について

伊藤 好英……………97

ほかひ人の論

吉田 修作……………125

異郷と他界



蘇生譚及び他界相

皆川隆一……161

井口樹生……190

あとがき

217

折口信夫 まれびと論研究

国文学論叢 新集五

柳田国男と折口信夫

——まればと論研究の序に代えて——

西村 亨

一

折口信夫の学説がまればと論を軸として組み立てられ、それが国文学・民俗学・芸能史などの各方面に展開せられて、学説の宇宙を形成した。このことは池田彌三郎の所説を代表として、多くの研究者の容認するところである。まればと論を否定することは、折口信夫の学説の全体を根本において認めないということになるかも知れない。それほどにまればと論の折口学説に占める位置は重要である。ところが、折口信夫が終生学恩に感謝し、自己の学説がその影響下に成り立ったと明言している、その師柳田国男は、折口信夫のまればと論を最初から最後に至るまで容認しようとしなかった。このことは折口信夫の学問に付せられた大きな疑問符であり、折口信夫個人にとっても終生の恨事であつたろうと思われる。

もちろん、柳田国男は折口信夫の学問のすべてを否定したわけではない。それどころか、折口信夫のたぐいまれ

な学問的資質を称揚し、その「直覚」を東洋風な学問の長所とまで言っている。⁽²⁾「折口信夫君とニホのこと」⁽³⁾などは折口信夫の直覚の鋭さを例証したもので、大正四、五年のころ折口信夫がニホはニフナメのニフだと断言したのを、自分は証拠がないからと認めなかったが、近年に至ってやはりそうでなくてはならぬという氣になったと言い、「智慧の開きの二十何年の差は情けないと思つた」とまで誉めあげている。

それにも拘らず、柳田国男はまれびと論に関しては冷厳なまでに否定的である。周知のように折口信夫の最初まれびと論である「常世及び「まれびと」」は柳田国男によって雑誌「民族」への掲載を拒否されており、⁽⁴⁾その二十余年後においても、「マレビトの考えはそれ（筆者注、沖縄採訪）より前だから、やはりご自分の古典研究、古典の直覚からきたものとしかみない。」⁽⁵⁾という発言がなされている。

二

柳田国男と折口信夫とは十二歳の年齢の開きがある。この干支ひとまわりの年齢差は師弟関係の上で特別な親近性を醸成する要因があるかと思われる。坪内逍遙と島村抱月がひとまわり違いの師弟の一例であるが、そういう類例との比較においても、十二歳という年齢差は師の指導力が十分にその効果をもつだけの開きがあり、一方、弟子が師説を消化し追認する力量をもち得るだけの近さがあると考えられる。さらに、その師が三十代、四十代の学問の発展の時期にこれに接することができ、学説形成の過程なども至近の距離から観察し、吸収することができる。そういう観点から、意味ある年齢差と言い得るであろう。

折口信夫は柳田国男と相知る以前、かなり早い時期からその存在を知っていた。昭和二十一年九月「日本民俗学

講座」のためになされた講演「先生の学問」⁽⁶⁾の中では、

「後狩詞記」・「石神問答」や「遠野物語」の出る前にも、仙人の事などに先生が興味を持つて居られるといふやうな話を始終聞いてゐました。

と言って、平田篤胤などと似た、神道への関心ある人と思っていたことを告白している。さらに、それ以前に松岡姓で書かれたものが出ていたが、それと連絡させて考えることをしなかったとも言っている。柳田国男が松岡姓であったのは明治三十四年までであり、この年折口信夫は数え年十五歳であるから、中学下級生の時分にすでに柳田国男が松岡国男として発表していた文章に接していたわけである。おそらく、それは「文学界」「帝国文学」その他に発表せられた新体詩や紀行文のたぐいであろうが、折口信夫の読書歴として中学初年に「文学界」等の雑誌を読んでいたことは間違いなからうから、この記憶は誤りのないものと思われる。

それらの文学的な作品とは繋がりなかったが、『後狩詞記』以前から柳田国男の評判を耳にもし、発表する論文をも読んで、次第にその学問に関心を深めていったということであろう。

右の講演より少し後の時期に、

柳田先生が『人類学雑誌』、『考古学雑誌』にお書きになっている時分に読ませていただいて、不思議な学問もあるものだと思います。⁽⁸⁾

とも言っているのは、符節を合せたように、折口信夫が柳田国男の学問に注目し始めた時期のことを語っている。

『後狩詞記』の刊行は明治四十二年三月であるが、ちなみに柳田国男の考古学会入会は明治三十六年七月二十日発行の「考古界」⁽⁹⁾第三篇第二号に報ぜられている。数年後には学会の中心のメンバーのひとりとなっており、「考古界」が「考古学雑誌」と題号を改めた時には、その会告に、

今回柳田國男氏の斡旋により、書肆聚精堂は進みて本會雜誌の發刊發賣等經濟上に關する一切の事務を擔任の
こととなりたれば⁽¹⁰⁾

とあるように、柳田國男がおおいに尽力して雜誌発行の体制を整えている。聚精堂はこの前後、柳田國男の『石神問答』『遠野物語』『時代ト農政』の出版に當った書肆である。明治四十四年には柳田國男は考古学会の評議員を囑託せられている。

折口信夫の考古学会入会は明治四十一年十月二十日発行の「考古界」第七篇第七号に報ぜられている。なお、当時の考古学会は、人類学会もそうであるが、研究対象の間口が広く、風俗・習慣・宗教・儀礼・口碑・伝説・年中行事等をも対象に含んでいる。

柳田國男の人類学会入会は明治四十三年七月二十日発行の「東京人類学会雑誌」第二百九十二号に報ぜられている。このほうではすでに、二百九十号に『石神問答』が、二百九十二号には『遠野物語』が「新著紹介及批評」欄に登場するなど、学会入会以前から親近な関係が見られるが、入会后すぐに十月一日の例会で「盆踊に就て」の講演を行い、大正三年には評議員に選出せられている。

折口信夫の入会は明治四十四年十二月十日発行の「人類学雑誌」第三百七号に報ぜられている。⁽¹¹⁾

折口信夫がこれらの学会の会員になっていると否とに拘らず、入会以前からその機関誌を読んでいた可能性は十分あるわけで、みずから会員として入会したのは、その学問的関心が一段と深まり、定着したことを示すものであろう。厳密に言えば、『後狩詞記』以前には柳田國男はこの両学会の機関誌にまだ論文を発表していない。年表式に整理すれば、

- | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|----------------|-----------------------|-----------------|----------------------|----------|----------------|
| 明
45・
2 | 11 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 明
44・
4 | 12 | 11 | 6 | 5 | 明
43・
2 |
| 「踊の今と昔（五）」（人類学雑誌二七 5） | 「イタカ」及び「サンカ」（二二）（人類学雑誌二七 8） | 「イタカ」及び「サンカ」（二二）（人類学雑誌二七 8） | 「イタカ」及び「サンカ」（二二）（人類学雑誌二七 8） | 「踊の今と昔（四）」（人類学雑誌二七 4） | 「踊の今と昔（三）」（人類学雑誌二七 3） | 「踊の今と昔（二）」（人類学雑誌二七 2） | 「山神と「ヲコゼ」」（同右） | 「踊の今と昔（一）」（人類学雑誌二七 1） | 「十三塚」（考古学雑誌一 4） | 「アイヌの家の形」（人類学雑誌二九 6） | 『遠野物語』出版 | 『石神問答』出版 |
| 「子安の石像」（考古学雑誌一 11） | | | | | | | | | | | | 「十三塚」（考古界八 11） |

ということになる。折口信夫が一方で『後狩詞記』や『石神問答』『遠野物語』によって新しい学問に行き会った驚き・喜びを言い、⁽¹³⁾ 一方でそれ以前に「人類学雑誌」や「考古学雑誌」に発表されるものによって「不思議な学問もあるものだ」と感じたと言っているのは、事実としてはほぼ同じ時期に著書にも触れ、学界誌発表の論文にも触れて、急速に理解を深め、そこにみずからの道をも見出していったということになるであろう。

ついでに言えば、折口信夫は『後狩詞記』は出版当時すぐに入手することができなかった。しかし、『石神問答』や『遠野物語』はすぐに入手している。このことは、「先生の学問」の中で、

「後狩詞記」は、雑誌の附録として出た為に知った時はもう手に入らず。「石神問答」・「遠野物語」は手に入れたことは出来ました。

と明示されている。ところが、『古代感愛集』所収の「遠野物語」という一篇の詩があつて、

大正の三とせの冬の

風のふく日なりけむ。

と歌い出され、神田神保町の露店の本屋で古本の『遠野物語』をあがなった経験が感激をこめて歌いつづけられている。この経験自体は事実だったのであろう。折口信夫全集第三十一巻の「年譜」にも採られて、

冬の一日、神田の露店で柳田國男著『遠野物語』を宛め、深い感動を受ける。⁽¹⁴⁾

と記されている。近年これに誤られて、折口信夫が『遠野物語』を知ったのは大正三年であるとする論者もあるが、「先生の学問」の中には『遠野物語』に接したのは「学校を終る頃」だとも言われている。折口信夫の国学院大学卒業は明治四十三年七月であつて、『遠野物語』はまさにその直前に刊行されている。このことは折口信夫の伝記上の小さな事実ではあるが、その学問の形成の時期に関わることであるので、ここに確認しておきたい。⁽¹⁵⁾

ともかく、折口信夫が早くから柳田国男の著作に触れており、柳田国男が民俗学の方面へ足を踏み入れてゆく時分からその学問に注目していたことが知られる。その印象は、

ともかくも何か私どもの待ち望んでゐた學問に行きあつたといふ氣が強く心に來ました。國文學でも史學でもないが、まるきり違つてゐるものでもない、かう言ふ學問が、はじめて我々の前に現れて來た。其は、明らかに、大きな驚きでした。⁽¹⁶⁾

というふうに語られている。それは新しい學問の興ってくることへの期待であり、興奮であつたであらう。『古代研究』の「追ひ書き」に言うように、遊民として生涯を埋没させねばなるまいかという、前途に対する暗い予期をさえ懷いていた折口信夫が、そういう中であつてわずかに見出し得た光明でもあつたと思われる。

三

大正二年三月、柳田国男によって雑誌「郷土研究」が創刊される。折口信夫は「己の學問の行く所を確認した」と言っており、この時分から本氣で柳田国男の拓いた道を追隨しようという覚悟を決めたようである。この年、「三郷巷談」を「郷土研究」に投稿、十二月にそれが掲載される。翌大正三年三月今宮中学校の教職を辞して上京後を追つて上京して來た十名ばかりの教え子たちと同宿、生活に苦しみながら進路を摸索し続ける。

この時期に折口信夫が柳田国男を直接訪ねて入門を求めるといふことがあつてもよさそうに思われる。しかし、實際にこの二人が会うことになるのは大正四年のおそらく夏以後のことになる。その初対面の時点の推定は池田彌三郎の『私説折口信夫』に委曲が尽されている。⁽¹⁸⁾ただ、ここでは、同書に折口信夫という名を誰かの筆名かと思つ

ていた柳田国男に対し、その認識を改めさせたのは金田一京助であつたらうと推定されているのに対し、柳田国男自身がそれは中山太郎であつたとはっきり言っていることを指摘しておきたい。『故郷七十年』の中で、

信夫(しのぶ)といふ名前にしても、折口といふ苗字も哲學の哲といふ字を二つにしたペンネームであらうと、抛ふつておいたところ、二ヶ月も三ヶ月もしてから中山太郎といふ人が「折口といふ人は國學院を出た實在の人ですよ。しかし大へん變つた方です」といふ話であつた。⁽¹⁹⁾

と述べられている。

折口信夫がなぜ柳田国男に会おうとしなかったか、その理由は、後年においてもその初対面について語っていないこととともに、その伝記上のひとつの謎である。⁽²⁰⁾ 柳田国男のほうでは、右の引用に続けて、

何とかして會つてみたいと思つてゐたが、そのころ私は貴族院書記官長の仕事をしてゐたので、折口君の方では億劫がつてなかなか寄りついてくれなかつた。

と言つていて、中山太郎を通じてその意向を伝えたというくらいことはあつたように思われる。折口信夫の側に理由があるとすれば、その氣の弱さによるのであらうか。同じ頃のことと思われるが、与謝野鉄幹に会いたと思つてその門前まで行きながらついに門を叩くことをしなかつたという話もある。⁽²¹⁾

なお、ふたりの出会いについて、『定本柳田国男集 別巻第五』の年譜には、大正五年の項に

このころ折口信夫はじめて訪ねてくる。

と記載されているが、これについては年譜の作成者鎌田久子氏が、右の池田彌三郎の考証に従つて、公式にこれを訂正していられる。⁽²²⁾

この時期においてもうひとつ氣にかかることは、『故郷七十年』の同じ個所に、「郷土研究」の第一巻にしばら